

# DISCUSSION PAPER SERIES

オーラル・ヒストリーの可能性—仮説の発見と実証—

清水 唯一朗

2009年4月

RPSPP Discussion Paper No.4

# *RPSPP*

RITSUMEIKAN : POLICY SCIENCE & PUBLIC POLICY

Policy Science Association  
Ritsumeikan University  
56-1, Tojiin-Kitamachi, Kita-ku,  
Kyoto, 603-8577, Japan.

オーラル・ヒストリーの可能性—仮説の発見と実証—

清水 唯一朗

2009年4月

RPSPP Discussion Paper No.4

\*このディスカッションペーパーは、2008年12月22日に行なわれた大学院GP「地域共創セミナー」の口述記録を要約整理したものであり、許可のない引用・転載等の利用は出来ません。引用・転載の際には、著者の許可を得てください。

清水唯一朗（慶應義塾大学総合政策学部専任講師）

E-mail:yuichiro@sfc.keio.ac.jp

地域共創シリーズ No.4

## 「オーラル・ヒストリーの可能性—仮説の発見と実証—」

**司会（森・公務研究科）**：本日は、慶應義塾大学総合政策学部の清水唯一朗先生にお越しいただきました。私たちは、研究を進めるうえでフィールドワークあるいは聞き取りなど、様々な形態の調査を行います。しかし、その方法論については必ずしも体系的に学んでいない方も多いのではないのでしょうか。そのような中で、本日は聞き取り調査の手法の1つであるオーラル・ヒストリーについて理解を深めるため、清水先生にお越しいただきました。では、どうぞよろしくお願いいたします。

**清水**：ただいまご紹介いただきました清水唯一朗です。本日は「オーラル・ヒストリーの可能性—仮説の発見と実証—」というタイトルでお話をさせていただきます。本日は大学院修士課程の方が中心であるとお伺いしました。ですので、まずは、オーラル・ヒストリー全般について、刊行されている、つまり皆さんが入手可能なものを題材にあげながら具体的にお話をします。次に、オーラル・ヒストリーの手法について説明をしながら、この手法の利点と注意点について説明をいたします。その上で、修士論文の研究への応用を視野に入れながら、オーラル・ヒストリーが研究の導入にどう役立つのか、そして研究を進める上でどのようにこれを用いることができるのかということをお話し、地域共創という観点に立つと、どのような可能性が開けていくのかをお示しして、皆さんとディスカッションできればと思っています。

### 1. オーラル・ヒストリーの定義

**清水**：まず、オーラル・ヒストリーについて定義的なお話をしておきたいと思います。オーラル・ヒストリーとは一体何であるのかという話をするとき、必ず取り上げられるのがエセックス大学の社会学者、ポール・トンプソンが掲げた「記憶から歴史へ」という言葉です<sup>1</sup>。人の記憶を歴史にするということですから、不可視である記憶を可視化された記録に変換し、それを歴史の文脈のなかに位置づけていくことと理解できるでしょう。中国や台湾では「口述歴史」と表現されていますが、ここからも口述の作業と歴史に照らしていく作業の二つから構成されるということがイメージできるかと思います。

では、口述の対象となるのは誰なのでしょう。第一に政治家、官僚をはじめとする公人を対象とするものが考えられます<sup>2</sup>。第二に、財界人、芸術家といった著名人に対するものがあるでしょう。第三に、これまでの人たちとは異なり、文字資料にあまり残らない一般の人、市井の人を対象とするものが挙げられます。京都で行われてきた例で挙げれば、大原女へのオーラル・ヒストリーなどはその一例ということができるでしょう。いずれも

---

<sup>1</sup> ポール・トンプソン（酒井順子）『記憶から歴史へ—オーラル・ヒストリーの世界』青木書店、2002年。

<sup>2</sup> 御厨貴『オーラル・ヒストリー』中央公論新社（中公新書）、2002年。

上記の定義に基づくものであればオーラル・ヒストリーであり、その意味において、研究関心に沿うという前提があれば、対象を限定しない手法であるということができます。

では例えば、伝承を聞いて文章にしていくとか、よくされるような聞き書きと言われるもの、行政学でよく行われるようなヒアリングであったり、雑誌のインタビューとどう違うのか。こういうことが必ず議論の対象になります。これについては、聞くという行為自体は何も変わらないものの、その目的と扱い方が異なる、というのがまずもっての答えとなるでしょう。

## 2. オーラル・ヒストリーの歴史

次に、歴史的な流れのなかで、オーラル・ヒストリーというものがどのように出てきたのかをお話しましょう。もちろん、いわゆる聞き取りの歴史というのは、のちほど触れますように大変古くからあります。しかし、まずもって今日のような形でのオーラル・ヒストリーの始まりを探るなら、その契機は戦後直後に求められます。第二次世界大戦が終わった後、コロンビア大学で行われたものがそれです。一度ならずも二度起きてしまった世界大戦を前に、なぜ戦争が起き、拡大し、長期化したのかという問いが立てられたのは、人間の営為として当然のことでした。一度目の経験がありながらどうして二度目の大戦の発生を防げなかったのか、拡大を防げなかったのか。これを考えるためには、入手可能な報道レベルの情報では限界があり、より意思決定層の情報にアクセスする必要があったのです。その方法として選択されたのが、政策担当者たちへの体系的な聞き取り調査でした。

この時、なぜ聞き取りでなく、オーラル・ヒストリーという言葉が選ばれたのでしょうか。それにはインタビューという既存の言葉に付帯していた商業的なイメージや、ヒヤリングという言葉にあった権力関係の示唆から離れ、可能な限り価値中立的な、学問的見地に立った聞き取りを行うことで、分析や考察に資する資料を得たいという意識が表れていると考えることができます。この点は、オーラル・ヒストリーを実施する際にも大きなポイントになるものですので、後ほど、詳しくお話します。

## 3. オーラル・ヒストリーの類型

いくつかの類型に分けて考えて見た場合、先述したような対象による類型化もありますが、これらは政治学、社会学といった学問分野に依拠した〇〇学史の要素を強く持つものですから、こうした概念的なものに縛られず、より実践的に捉える方が有効でしょう。その場合、リサーチ・デザインを含めた聞き方、組上げ方として、以下の3つの方法が考えられます。

第一に挙げる方法は、ライフ・ストーリーです。これは、ある人の人生をトータルで聞いて理解しようとする方法です。極端に言えば、揺り籠から墓場まで、お生まれになったときから現在までをお伺いするものですから、その方に対する理解を深められる一方で、相当の時間を要することとなります。かつて政策研究大学院大学で行われたプロジェクト

では、多くの政治家・官僚にこのスタイルで聞き取りを行い、大きな成果を挙げました<sup>3</sup>。しかし、その平均聞き取り時間は20回、40時間ほどになりますから、修士論文で取り組むとすると、現実的な問題としてお一人、お二人に何うのが最大値ということになるかと思えます。対象が限定されている場合に有効な手法であるといえるでしょう。

第二の方法は、テーマ・オーラルと呼ばれるものです。ライフ・ストーリーが、ある個人への理解を重視したものであるのに対して、これは、題材を絞ってお話を伺うことで、あるテーマについて限定して知ることができます。もちろん、トータルに人生を伺わないことで認識構造をはじめとする個人への理解度は低減するきらいがありますが、同時に、一人に伺う時間を短縮することができるため、限られた時間のなかで複数の方にお話を伺うことができ、あるテーマについて広く理解することが可能となります。テーマが地理的、時間的限定を有しないものであるときには、特に有効でしょう。

第三に挙げるプロジェクト・オーラルが、今回、皆さんに特にお勧めしたいと考えているものです。これは、ある事例事案に関与した人に、できる限り網羅的にお話を伺うことで、事象の再構成を目指すものです。例えば、海面埋め立ての問題が紛糾したことについて、自治体、企業、賛成住民、反対住民、メディアと話を聞くことで、その事象がどのように動いていたのかを、場合によっては当事者より明確に把握することが可能です。森先生が取り組まれた発電所の事例研究もこの手法で行われたように記憶しています。

この手法は、公開情報が多くあるテーマに対しても有効です。現在は様々な審議会、委員会の議事録がすぐにWEBで公開、配信されるようになっていますが、そこでは音になった発言しか拾われていないことに私たちは留意する必要があります。発言していない人が何を考えていたのか、発言している人はなぜそのような発言をしたのか、委員会の場以外ではどのような動きがあったのかといったことは、議事録などの資料の入手が容易になればなるほど見過ごされがちになります。冒頭で、不可視のことを可視化できるのがオーラル・ヒストリーの利点である、と申しましたが、これは資料がある対象についても、いや、そうした対象についてこそ、より高い利点となって現れてくるといえるでしょう。

#### 4. オーラル・ヒストリーの実例

##### 4-1 公人に対するオーラル・ヒストリーの実例ー内閣総理大臣

それでは、実際、これまでどのようなオーラル・ヒストリーが行われてきているのかを実例に即して見ていきたいと思えます。まず、公人に対するオーラル・ヒストリーですが、歴代総理大臣に対して行われたもの、さらに商業出版されて書店で手に入れることができるものに限っても、岸信介、中曽根康弘、大平正芳、竹下登、宮沢喜一、森喜朗など、相

---

<sup>3</sup> 政策研究大学院大学 C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト（以下、GRIPS-COE。2000年4月～2005年3月）が行った研究の成果については、同プロジェクトの成果概要サイトを（<http://www3.grips.ac.jp/~oral/>）を参照されたい。

当数があります<sup>4</sup>。

その中でも、複数のオーラル・ヒストリーが行われている政治家が何名かいます。その代表例が岸信介です。岸に関しては2つの口述記録と1つの回想録が刊行されています<sup>5</sup>。口述記録の第一は伊藤隆先生、矢次一夫氏を聞き手とした『岸信介の回想』(1981年)です。もうひとつは、東京国際大学の原彬久先生が採られた『岸信介証言録』(2003年)です<sup>6</sup>。これら2つの口述記録に加えて、岸自身の名前で『岸信介回顧録』(1983年)が刊行されており、さらに最近、岸の地元である山口県の田布施で手帳が発見されています。こうした資料をクロスチェックしながら使っていくことで、岸という人物とその時代の様相は、随分と掴んでいくことができます。2つの口述記録には、伊藤先生は歴史学者、原先生は政治学者という聞き手の属性の違いもありますから、双方のオーラルを比べてみても、聞き手によってどのように話の引き出し方が、得られる記録が変わってくるのかを見て取ることもでき、オーラル・ヒストリーの手法研究においてもよい題材です。

同様のことは宮澤喜一についてもいえます。宮澤には、やはり2つのオーラル・ヒストリーとが2つ、自身の手による2つの回顧録が刊行されています<sup>7</sup>。とりわけ御厨貴先生らによる記録には、商業出版されたものとは別に科研費報告書の冊子があり、こちらでは出版の際にカットされた冒頭、終了後の談話部分が残されており、聞き取りが行われているその時の政治状況に対する宮澤の認識と、それを受けて行われるオーラル・ヒストリーの内容の対照を見ることができます<sup>8</sup>。

聞き手が入ることの意味を教えてくれるのが中曽根康弘首相の事例です。中曽根には、佐藤誠三郎先生と伊藤隆先生が聞かれた『天地有情』というオーラル・ヒストリーがあります<sup>9</sup>。これに加えて、数種の自伝がありますし<sup>10</sup>、複数の日記を用途に応じて付けていることが知られています。そうしたものとつぎ合わせていくことで、ここで挙げられている回想上の事実はもちろんのこと、いつ、どのように語られたのかを見ることで、一人の政治家の認識が、時代変化に応じてどのように推移していくかも知ることが可能でしょう。

---

<sup>4</sup> 商業出版以外では、『海部俊樹(元内閣総理大臣)オーラル・ヒストリー』上・下(GRIPS-COE、2005年。聞き手：伊藤隆ほか)がある。

<sup>5</sup> 岸信介(聞き手：伊藤隆、矢次一夫)『岸信介の回想』文芸春秋、1981年。同(聞き手：原彬久)『岸信介証言録』毎日新聞社、2003年。同『岸信介回顧録』廣濟堂出版、1983年。

<sup>6</sup> 原の聞き取りについては、原、大嶽秀夫、御厨貴「オーラル・ヒストリー鼎談」(日本政治学会編『年報政治学 2004 オーラル・ヒストリー』岩波書店、2004年)に詳しい。

<sup>7</sup> 宮澤喜一(聞き手：御厨貴ほか)『聞き書宮澤喜一回顧録』岩波書店、2005年。同(聞き手：五百旗頭真ほか)『90年代の証言 宮澤喜一』朝日新聞社、2006年。宮澤喜一『戦後政治の証言』読売新聞社、1991年。同『東京一ワシントンの密談』中央公論社(中公文庫)、1991年。

<sup>8</sup> この点については、牧原出・東北大学教授が「第3回オーラル・ヒストリー クリティークの会」における報告で指摘している。

<sup>9</sup> 中曽根康弘(聞き手：佐藤誠三郎、伊藤隆)『天地有情』文芸春秋、1996年。

<sup>10</sup> 中曽根康弘『戦後政治』読売新聞東京本社、2005年。同『自省録』新潮社、2004年。同『政治と人生』講談社、1992年など。

## 4-2 公人に対するオーラル・ヒストリーの実例－官僚

次に、官僚 OB に対して行われたオーラル・ヒストリーについてお話しします。日本の戦後政治が官僚政治と称されるのであれば、官僚、それも官僚中の官僚に話を聞くことが大きな像を理解する入口になるのではないかと。そうした考えもあったのでしょうか、政策研究大学院大学のプロジェクトが想起に本格的に取り組んだのが後藤田正晴へのオーラル・ヒストリーでした。ご存じの通り、後藤田は、内務官僚から警察庁長官に累進し、田中角栄内閣の官房副長官、参議院議員、官房長官、衆議院議員、副総理と歩んだ人物です。これは 20 回以上にわたる長いオーラル・ヒストリーで、その後、他のオーラルを位置づける際の軸として扱えるものになっています。経済系では、宮崎勇<sup>11</sup>、国土計画では下河辺淳のオーラル・ヒストリーが刊行されています<sup>12</sup>。

先程、みなさんの自己紹介をお伺いする中で、何人かの方が地方自治の研究に取り組んでいらっしゃるということでした。自治官僚に対するオーラル・ヒストリーは、私自身が意識的に進めてきたものの一つでもあります。具体的には、自治官僚を経て知事になられた方のオーラル・ヒストリー、自治事務次官から岡山県知事を 5 期されて全国知事会の会長を務められた長野士郎、やはり次官から広島県知事、参議院議員に転じて法相をお務めになった宮澤弘、同じく広島県知事をされた竹下虎之助の 3 冊をご紹介します<sup>13</sup>。

長野さんも宮澤さんも竹下さんも、全員、キャリア官僚です。自治省で累進して行って、最後は知事になった。当然、聞き手としては地方自治の制度と実態、具体的には地方自治法の改正について聞きたいと考えました。ところが、手を変え品を変えて伺っても、記憶を引き出せないのです。自治官僚にとって、地方自治法改正は、ルーティンワークとはいわないまでも、極めて日常なことであって、特段、記憶に残るような特性を持つものではなかったのです。このことが分かったことは、自治官僚の行動、認識を理解する大きなカギとなりました。

他方、この方々が鮮明に覚えていらしたのは、昭和の町村合併でした。町村合併促進法が昭和 28 年に施行され、一定の評価を得ていった。この時の取り組みは、地方自治法のそれとは異なる、非日常的な仕事であった。それだけに記憶も鮮明であり、多くの情報を得ることができました。

もう 1 つ、非日常ということの説明できるのが、若い時分に地方に派遣された時のことです。当時の自治官僚は、必ず一度地方に出て現場を見ることが行われており、長野氏は福岡、宮澤氏は千葉に二度に出ています。宮澤オーラルの中では、二度目に千葉県に副知

<sup>11</sup> 宮崎勇『証言 戦後日本経済—政策形成の現場から』岩波書店、2005 年。

<sup>12</sup> 下河辺淳『戦後国土計画への証言』日本経済評論社、1994 年。

<sup>13</sup> 長野士郎（聞き手：御厨貴、飯尾潤、大杉覚、清水唯一朗）『わたしの 20 世紀』学陽書房、2004 年。宮澤弘（聞き手：御厨、飯尾、大杉、清水）『地方自治に生きる』第一法規、2007 年。竹下虎之助（聞き手：伊藤隆、小池聖一ほか）『地方自治とは何か』現代史料出版、2006 年。

事として赴任した時、地方自治体の財政が極めて厳しい状況の中で京葉工業地帯の埋め立てを行うにあたり、独自の資金獲得を行ったこと（千葉方式）など、極めて具体的な話を伺うことができました。

これらの事例から何をお話ししたいかといいますと、いずれの方の人生にも、場合によってはあるプロジェクトにも、ハレとケがあるわけです。ルーティン・ワークや、それに近い仕事については、やはり細部は覚えていない。これは当たり前のことです。他方、非日常的なもの、イレギュラーなもの、大きな動きの事例はよく覚えている。私たち自身に照らしてみても、これはよくお分かり頂けると思います。ですから、普段のことを聞くというのが、実はとても難しく、対象に応じた工夫が必要な部分になってきます。

#### 4-3 ライフストーリーの実例

本日ご参加のみなさんですと、社会学、社会史的視点からのライフ・ストーリーについてはあまり詳しくお話をする必要はないかと思いますが、その特性については参考になると思いますので、簡単に触れておきます。

文字記録をあまり持たない人々の記憶を、どうやって歴史にして位置づけていくかという営みは「声なき声を声にする」という言葉に象徴されるように、聞き取りによって長く行われてきています<sup>14</sup>。

やや極端な事例になりますが、『ラディカル・オーラル・ヒストリー』という研究書をご紹介したいと思います<sup>15</sup>。保莉実さんという私と同世代の研究者（故人）が、オーストラリア国立大学の研究員になり、アボリジニの村に入って参与観察をしながら行ったオーラル・ヒストリーと、それを元にした研究がまとめられています。彼は、現地で起きた洪水を神の所業であるとする語りをもって、彼らにとっての事実があることを提起しています。

この研究から敷衍して考えられるのは、研究者側の認識構図と、話し手側の認識構図には、それが日本人とアボリジニの間だけでなくとも、相当の距離が存在するという事実、もしくは問題点です。課題といってもいいかもしれません。果たして、文字資料を読んでいる時に、私たちはどれだけ相手側の認識構図に迫ることができているのでしょうか。実は、オーラル・ヒストリーを用いて研究を行うことの大きな利点のひとつがここにあります。この点は、後ほど、まとめてお話をします。

#### 4-4 プロジェクト・オーラルの事例

次に取り上げるのが、先ほど、皆さんにお勧めしたいとお話ししたプロジェクト・オーラルの実例です。大学院では、どうしても研究成果を出すリミットが存在するのも、避けがたい事実です。特に修士で修了される方はテーマを決めて、フィールドワークに出て、

---

<sup>14</sup> 社会学・社会史の観点からのライフ・ストーリー案内には、桜井厚『インタビューの社会学』せりか書房、2002年がある。

<sup>15</sup> 保莉実『ラディカル・オーラル・ヒストリー』御茶の水書房、2004年。



論文としてまとめるまでを実質1年程度で行わなければならないわけですから、大きな時間的制約がある、ということは肌で感じられているかと思います。しかし、そうした中で、研究として、よりよいものと生み出して行かなければならない、そのための方法を考えていかなければならないわけです。

こう考えると、政策研究大学院大学でのプロジェクトで行っていたライフ・ストーリー型のオーラル・ヒストリーは、時間の面でも、費用の面でもいさかコストが大きいことも事実でしょう。ですから、聞き取りの対象を絞って、ある1つの事件であったり、ある1つの事例であったり、ある1つの組織文化を明らかにしようという方法が、より合理的かつ合目的であるように思うわけです。

いくつか例を挙げましたが、具体的に取り上げてお話しするのはロバート・マクナマラの『果てしなき論争』です<sup>16</sup>。ベトナム戦争長期化の責任者であったマクナマラは、自らの説明責任を果たすべく、すでに回顧録を執筆、公刊していました<sup>17</sup>。しかし、それでは説明が十分ではなく、また、異論も存在しました。そのため、当事者たちをできるだけ集めて、当時の意思決定について、皆でもう1回議論するという試みを行いました。その成果が『果てしなき論争』です。全員集まることによって、個別であった証言が洗練され、信頼性が高まり、記憶が喚起されるということが、まさにこの場で起こっているという、大変興味深い試みですので、ぜひ、ご一読いただければと思います。

さらに、実際に進んでいる現実を、できる限り直後の段階で記録する試みも行われています。阪神淡路大震災ののちに設立された復興委員会では、これに参加していた下河辺淳氏に対する同時進行オーラル・ヒストリーが行われています<sup>18</sup>。

#### 4-5 日本における「聞く」ことの歴史

そろそろ中身のお話に入っていきたいと思います。「聞くということ」という視点に立つてみれば、伝承であったり、聞き書きであったり、ヒアリングであったり、オーラル・ヒストリーであっても、全て行為としては同じです、というお話をしました。日本でも、もしかすると日本は特に、口述によって歴史を語り継ぐことが行われてきたように思います。極端なことを言えば、稗田阿礼が太安万侶に対して語ったところまで遡れるのかもしれませんが。ただ、私たちが今、オーラル・ヒストリーと称しているような、選り直接的に活かしていくことを意識して行われる聞き取りということで考えた場合には、おそらく、近代国家が誕生してくる中で、記憶を記録にすることの能動的な意味というものを考えていった時を、そのはじめとして挙げることはできないのではないかと思います。

---

<sup>16</sup> ロバート・S.マクナマラ編（仲晃訳）『果てしなき論争—ベトナム戦争の悲劇を繰り返さないために』共同通信社、2003年。

<sup>17</sup> ロバート・S.マクナマラ（仲晃訳）『マクナマラ回顧録—ベトナムの悲劇と教訓』共同通信社、1997年。

<sup>18</sup> 『「阪神・淡路震災復興委員会」（1995—1996）委員長下河辺淳「同時進行」オーラルヒストリー』上・下、GRIPS-COE、2002年。

その契機となったのは明治維新です。江戸から明治になる、江戸幕府がなくなって、明治新政府ができるということは、これまで全く中央政府の経験のない人々が、京都から、薩摩から、長州からやってきて政権を担当するわけですから、そこには統治の知が存在していないわけです。これは、意識的にどこからか持ってくる、つまり、旧幕府でそれを担当していた官僚たちに聞く以外に有効な手段が存在しないわけです。こうして行われたオーラル・ヒストリーの『旧事諮問録』があります<sup>19</sup>。実際の行政担当者が、自分たちの直面する問題意識に従って聞いていったという生の記録です。これはまさに行政の知を残し、次に活用していくためのオーラル・ヒストリーでした。

もう1つ、別の流れとして、活字メディアの発達と商業化に伴う、記憶と記録の商業化という動きがありました。『太陽』、『中央公論』といった雑誌や『東京日日新聞』（現在の毎日新聞）、『東京朝日新聞』、『時事新報』などに、多くの場合は連載として、幕末維新期の活劇が、ストーリーとしてのおもしろさを伴いながら展開されていきました<sup>20</sup>。

もう1つ、民俗学の流れがあります。柳田国男や宮本常一らが全国を回って地域ごとの語りを残していったことはよく知られています<sup>21</sup>。近年立ち上げられた日本オーラル・ヒストリー学会（JOHA。Japan Oral History Association）には、民俗学、社会史、生活史などの分野でオーラル・ヒストリーに積極的に取り組んでいる研究者の方々が学術交流をおこなっています。

#### 4-6 なぜオーラル・ヒストリーなのか—戦後の歴史化

ここからが今日の本番になります。今までの研究は、文字資料によって進めてきたのに、なぜ、オーラル・ヒストリーという手法が出てきたのか、という発端の部分についてお話をしておきたいと思います。

その大きな理由は、戦後の歴史化ということで説明できるように思います。それまでの歴史研究は、特定の人物が残した日記や書翰といった文字資料を扱うことで、彼らの意識へのアプローチを行い、課題を解き明かしてきました。近代であれば、伊藤博文、山県有朋といった人物を想起していただければよいでしょうし、それ故に、彼らの資料は国会図書館などに集められ、ご遺族の理解のもと、積極的に研究の用に供されてきました。

他方、1972年に国のアーカイヴスである国立公文書館が開館する、アメリカでGHQ文書の公開が始まるという状況になって、研究が戦前から戦後へと伸びてきました。ここで、研究者は、はたと気付くわけです。これまで、日記や書翰で当事者の意識にアプローチしてきたものが、戦後になってはそうはいかない。戦後が電話の時代であったことを考えても、やりとりの記録は、戦前と比較して圧倒的に残りにくい。そうなった場合に、これま

<sup>19</sup> 旧事諮問会『旧事諮問録』上・下、岩波書店（岩波文庫）、1986年。

<sup>20</sup> これらをまとめた代表的なものとして福澤諭吉『福翁自伝』岩波書店（岩波文庫）、1978年。勝海舟（勝部真長校注）『海舟座談』岩波書店（岩波文庫）、1983年。

<sup>21</sup> 宮本常一『忘れられた日本人』岩波書店（岩波文庫）、1984年。柳田国男『遠野物語』角川書店（角川文庫）、2004年。

での日記や書翰に代わる方法としては、聞くことしかないわけです。平成 11 年に情報公開法ができてからは、この傾向が一層強まることになりました。

加えて、省庁再編や市町村合併、企業の M&A などが進行して従来とハコが変わるという自体が生じていくと、その過程で資料が散逸してしまう、記録そのものが存在しない、という問題も生じてきました。入りきらないものは捨ててしまう、という事態は研究者からすれば噴飯ものですが、当事者たちからすれば、ごく自然な整理のひとつとして行われてしまうわけです。

さらに、文書の電子化が進んだことで、意思決定の過程が見えにくくなってきています。従来の公文書は、起案から成案までが逆順に綴じられており、それを遡及することで、どの部分が、いつ、どのように変わったかを把握することができました。それが文書の電子化によってバージョンに沿った保存がされなくなると、始点と終点の情報しかえることができず、過程が全くわからないという状況が生じるに至りました。

一方で戦後が歴史的アプローチによる研究の対象となり、他方で、資料の散逸、資料形態の簡素化が進んでいる。こうした状況の中で、意識や欠落部分という、資料と資料のあいだの部分を理解していくために、オーラル・ヒストリーが有効となるわけです。

#### 4-7 なぜオーラル・ヒストリーなのか—結果重視からプロセス重視へ

また、政治学全体の動向を見てみると、結果重視からプロセス重視にその視点が推移してきているように思います。とりわけ、意思決定アプローチと政策評価が登場してきたところ、情報公開の流れによって、特定の研究者以外でも政策文書が見られるようになったことは大きいでしょう。

そうすると逆に、今まではある一つの組織文化の中で、説明する必要がなかった文法や、組織文化、特殊な言い回し、ジャーゴンといったものの存在がネックになってきます。さらには、この文書にはどういった意味があるのか、どの段階で、どういった効果を有するものであるのかということが、組織外の人間がアプローチした場合にはわからない。こうした、資料に対するコンメンタルが実は大変重要になってくるわけです。これがオーラル・ヒストリーを通じて可能であることはいまでもありません。

さらに政策評価や、皆さんが研究で取り組まれているように、より具体的にどのような政策につなげていくのかという段階になりますと、消された選択肢について意識を払う必要が出てきます。現在の政策がよかったにしろ悪かったにしろ、それ以外の選択肢も、かつては存在したはずですが、いくつかの選択肢の中から、議論を経て、折衷されたりして現在の政策があるわけですから、最終的な結果だけに着目して評価を行い、次策を策定していくことには、本質的な問題や、過去に検討された経緯を見失わせる危険性が潜んでいます。こうした研究の代表的な例として、石炭政策の消長を扱った佐脇紀代志氏の労作があります<sup>22</sup>。消された可能性のアクセスをして、多面的な分析をしていくことが必要であり、

<sup>22</sup> 佐脇紀代志『政策の長期継続に関する要因分析』東京大学先端科学技術研究センター御

そうした残っていないデータを得るためにも、オーラル・ヒストリーを行う意味、それによって開ける可能性があるわけです。

## 5.オーラル・ヒストリーの特性

### 5-1 オーラル・ヒストリーの長所—（広義の）質的データ確保

ではオーラル・ヒストリーの長所と短所についてお話していききたいと思います。長所の第一は、至極当たり前のことですが、質的データを確保できるということです。口述記録そのものから得られることはもちろんですが、前述したように、まず入手可能な文字資料があり、それを補い、豊かにするものとして口述記録はとても大きな効果を発揮してくれます。

これが基本的なところですが、この先にさらにプラスアルファの部分があります。オーラル・ヒストリーをしていると、よく「そのことはこの本を読めばよくわかるよ」「そのことについてはこの資料があるから貸してあげるよ」というアドバイスを頂くことがあります。人によっては、せっかく聞きに来たのに文字資料を提示されて終わっては、と残念がられる方もありますが、当事者ならでの、私たちがリサーチでキャッチし得ないような組織内文書、業界紙などの有用な書誌情報は、他の手段でカバーすることができない貴重な情報です。同様に、より詳しい人物を紹介して下さることもあります。私たちのアプローチに対して応えてくださる方は、1時間、2時間という時間をそのために割いて下さっているのですから、ベースとしては好意的であるはずですが、謙遜はされても、そのことについて語っておく意義がある、とお考えいただいて受けて下さっているわけですから、この好意には十分に応える必要があるはずですが。

### 5-2 オーラル・ヒストリーの長所—認識構造の把握と仮説の発見と構築

一つ目に挙げた質的データの確保、というのが通常の聞き取りで考えられている目的だと思いますが、いわゆるインタビューと研究に資するオーラル・ヒストリーの大きな違いとして、認識構造を把握し、仮説を発見して構築するきっかけが得られるという点が、オーラル・ヒストリーの一番大きな効果である、と私は考えています。

質的なデータが欲しいだけであれば、それは手紙のやりとりでも相当程度可能ですし、その方が圧倒的にコストも低く抑えられるでしょう。イエスかノーかで回答用紙を出せばいいはずですが、では何でわざわざ時間を取っていただいて、こちらも時間を割いて聞きに伺う必要があるのでしょうか。それは私たちがイメージしている政治家、官僚、実業家といった人々の認識構造は、およそその実態とはかけ離れているという現実があります<sup>23</sup>。考

---

厨研究室・先端公共政策研究会、2007年。これは佐脇氏が中心となって取り組んだ『石炭政策オーラル・ヒストリー』（GRIPS-COE、2003年）を題材とした同氏の博士論文である。  
<sup>23</sup> このことについては、森道哉が「偏見」と「鏡」という表現を用いて論じている（森『鏡』を合わせるということ」御厨貴編『オーラル・ヒストリー入門』岩波書店、2007年）。

えても見て下さい。私たち研究者は、高校、大学を出て、就職をせずに大学院に進んで研究を続けているという、やや通常とは異なるグループに属しています。自戒を込めていえば、いささか偏った生き方をしているわけです。その偏った経験と書籍から得た知識でイメージするもの、すなわち、私たちが持っている知識から見えている世界や立てられる仮説には相当な限界がある。このことは意識的に理解しておくべき事柄だと考えます。だからこそ、歴史研究は、当事者の日記を読み、書翰を読むという作業を重視してきたわけです。そこには時代だけではなく、経験と立場、環境という大きな隔たりが存在しているからです。

同時に、私は、オーラル・ヒストリーをしないで、文書だけで研究をしていると、どうしてもその人達の認識構図へのアプローチが足りていないのではないかという危惧を感じるようになってきました。私は戦前の研究もしていますので、対象者がすでに生存していないわけですからオーラル・ヒストリーを行うことができない。そうすると、対象と自らの距離ということ、それまでとは比較にならないほど、意識して研究に取り組むようになりました。

この認識の隔たりを理解する上で好材料となるのが、先述した保莉氏によるアポリジニへの聞き取りです。やや極端な例ではありましたが、「事実」についてさえ、認識の構造が異なっていましたよね。そう考えると、例えば政治家の日記であったり、手紙であったり、回想録という資料についても、「日記にこうやって書いてあったから、この人はこう思っていたんだ」「手紙にこうやって書いてあったから、この人はこう思っていたんだ」とストレートには書けなくなる。もう一歩引いてみて、資料を批判的に検討することの必要性を身をもって感じるようになりました。

すこし身近な例でお話ししてみましよう。今、ちょうど年賀状を書かれているころではないかと思いますが、年賀状には決まり文句として「今年もよろしくお願いします」と書きますよね。もしかすると「今年もよろしくお願いします」と本音では思っていない方にも、便宜上、礼儀上、「よろしくお願いします」と書いているかもしれない。これが、みなさんが歴史上の偉人になって、50年後、100年後に資料として出てきたとしたらどうでしょう。そう考えていくと実は、文字で残っている資料というのも、無批判には使えないわけです。それをわりと文字に残っているということで、信用をして批判のレベルを下げてしまっていてきているというのが、文字資料を扱う上での一つの大きな問題として存在します。最近よく使われる資料にWEBでの公開が進んできた各種審議会・委員会の議事録がありますが、これとて、ある人がそこである発言をした、ということは事実であるが、その人が本当にそう考えていたのかは定かではありませんし、何を意図した発言であったのかもわからないわけです。根回し、後回し、書き回しという政治文化が指摘されることに鑑みても、むしろ、議事録から意思決定過程を判断することには多くの危険性が伴っているということができるわけです。

そうして見てくると、文字は信頼できて、記憶や口述は信頼できない、というのは、文

字に依拠して研究を続けてきた世界に伝えられたひとつの神話であるということがわかるかと思えます。むしろ、オーラル・ヒストリーには聞き手と話し手が同じ時間を共有しながらインタラクションで記録を作っていくわけですから、その部分で、まず一つの検証、フィルタリングがされていると考えることもできるわけです。

このように、資料批判の精神、意義を体感するという意味、「事実とは何か」を考える機会としても、オーラル・ヒストリーは学問の大きな道を示してくれるように感じています。

### 5-3 オーラル・ヒストリーの長所—話し手と聞き手のインタラクション

聞き手と話し手のインタラクションも、オーラル・ヒストリーの意義の一つです。よく、先述したような、回顧録がたくさん出ている人に対して、つまり文字としての歴史を残している人に対して、どうして聞く必要があるのかということを知ることがあります。これには、さきほどの日記や議事録と同じ議論ができます。自伝には、事実関係のチェックとして問いかける相手は存在しません。当然、虚栄も虚偽も誇張も、ハードルが低くなります。それに、関係した多くのことが、あたかもご自身単独でなさったかのように書かれることもしばしばあります。当然、聞き手がいても始終、真が話されるわけではありませんが、むしろそこでは、聞き取りの際に真実を話さなかった、という新たな事実が生まれてきます。それはなぜか、というその先の議論ができるわけです。

聞き手がいる利点のもう一つは、誰にでもある定型の語りを破ることができる点です。久しぶりに田舎に帰り、実家でご両親、祖父母に会ってお話しする時のことを思い起こしてみてください。お話は、恐らく毎回同じ内容で、同じ進み方をするのではないのでしょうか。語りのスタイルは定型化しやすいのですね。これは公人も同じであり、特に何度もインタビューを受けてきた方、つまりそのテーマについて話慣れた方であるほど、決まった語りをされます。聞き手としては、その情報はすでに文字資料で知っているのに、と臍を嘔むわけですが、そこから一歩進めて、「それはなぜですか」「その時どうしたのですか」「その決定というのを一番サポートしてくれたのは誰ですか」「情報はどこから取りましたか」と、より具体的な、定型の語りには入ってこない切り口での聞き出しをしていくことができます。5W1Hでどんどんと聞いていくことが肝要です。

著作権で考えても、現在、オーラル・ヒストリーは話し手と聞き手の共同著作物である、と考えられています。両者のインタラクションによって、今まで出てきていなかった記憶が引き出されてくる、と考えるからです。ですから、すでに文字資料が充実しているから聞く必要がない、聞いても仕方がないというのは早計ですし、聞き手がどうやって聞くかに、オーラル・ヒストリーの成否は大きく左右されることがおわかり頂けたかと思えます。

### 5-4 オーラル・ヒストリーの短所、注意点

さて、オーラル・ヒストリーも、もちろん、万能ではありません。長所があるのと同様に、他の手法と同様に、注意して当たるべき点も多く抱えています。

その人が語っていることというのは、本当にそうだったのか。事実だったら証拠があるのか、ということはわかりません。単独の語りを無批判に信用することは、もちろんできない<sup>24</sup>。しかし、すでにお話ししてきましたように、これは文字資料でも同じことです。得られたマテリアルに対して、クロスチェックを通じて、しっかりした検証をしなければならぬことは、いずれの資料にもいえることでしょう。

もうひとつ、記憶は上書きをされる危険性を持っています。例えば、政治家や官僚 OBの方にお話を伺いに行くと、手元にたくさんの資料、それも最近作られたであろう資料を持たれていることがしばしばあります。それは何ですか、と伺うと、あなたたちが聞きたいと仰るから、現役に言って資料をまとめてもらって、説明をうけたんだ。だから今日はしっかりお話しできる、と言われることがあります。先方は好意で勉強して下さっているのですが、こちらは当時の記憶や行動を伺いたいわけですから、当然、困ります。これは、先方にオーラル・ヒストリーの趣旨をよく理解して頂いておらず、通常の質問やインタビューと同義に考えられた結果、生じる問題点です。これは、のちほど、実際の進め方の段階でお話しする第0回の行い方や、質問票の書き方で相当程度回避することができます。

## 6.オーラル・ヒストリーの事前準備

### 6-1 誰に聞くのか、どうアクセスするのか

それでは実際にオーラル・ヒストリーを実施していく際の手順についてお話ししていきます。まずは、誰に聞くのか、その人にどうやってアクセスをしていくのかという問題があるかと思えます。それはオーラル・ヒストリーの問題というよりも、皆さんが研究をする際の、リサーチ・デザインの問題に直結しているものです。オーラル・ヒストリーが研究に有効に働くための鍵は対象人物の選定にあります。事前のリサーチをしっかりと行った上で対象を決めないと、結果としてどうしようもない状態に陥りかねません。それは、権限関係や対立関係から、ある人に聞いたらある人に聞けないということがあるからです。

例えば、ある若手研究者が浅瀬の埋め立ての問題をめぐる、自治体と住民の対立を研究していました。彼はまず、アクセスが容易であった埋め立て反対派の人々に話を聞きに行きました。ここまではよかったです。次に、行政の側に聞き取りに行った時に、「反対運動の方たちは、こう言っていましたけど」とオーラルのなかで話してしまったのです。この瞬間に、このオーラルは極めて困難なものになりました。ここで問題であったのは、相手に聞きに行っていたということではなく、対立している反対住民の側の情報を、聞き手が何の遠慮もなく伝えてしまったことにあります。これは、逆に、行政の側に、自分が話したことも相手に筒抜けになる、という危惧を抱かせるのに十分でした。相手がどのように考えるか、受け止めるのか、という人間のあいだの機微を考えずに発言してしまったわけです。こうした意識は、オーラル・ヒストリーを実施する上では、全ての場面に

---

<sup>24</sup> 御厨貴「オーラル・ヒストリーとは何か」（前掲、御厨編『オーラル・ヒストリー入門』所収）。

において重要な意味を持ってくるものだと考えられます。

この事例からもお分かり頂けるように、どこから聞かかということについて、事前に意を用いながら計画しておくことが重要となります。何を聞きたいか、誰に聞きたいか、というの大きな問題になってきます。受け手から聞きたいのか、全体像を聞きたいのか、発信者から聞きたいのかということを含めて、事前に組み立てておく必要があるわけです。

例えば、私のキャンパスの学生にインタビューを勧めると、ウェブを探して、そこに記されている連絡先に連絡をして「会ってください」というアプローチを取る場合がよくあります。そうすると大体、企業や団体であれば広報部の方が出てくることが多くなります。積極的にアクセスしていくこと自体は評価したいのですが、広報部にお話を伺っても、学生が知りたいと思う生の情報にはなかなか辿り着かず、それこそウェブで確認できる公式見解のような話に終始することが多くなってしまいます。これでは折角のオーラル・ヒストリーが勿体ないことになってしまいます。

そうした問題を回避するためには、いきなりアクセスするのではなく、事前にリサーチをして、実際に本当にそのことをやっている人がどこにいるのかという情報を押さえておく必要が出てきます。そうした下調べがきちんと行われていれば、相手も相応の姿勢をもって迎えてくれますし、話に対するこちらの理解度が高くなる結果、より深い部分まで話を聞くことが可能になります。話は、相手のレベルに応じて展開されるインタラクションであるのですから、こちらのレベルを可能な限り高めておくことは、不可欠な事前準備になるわけです。

もうひとつ、どのようにアクセスをするのかということも、実は語りに影響すると考えられます。方法としては、人づてで紹介してもらう場合と、直接に依頼する場合が考えられますが、いずれも一長一短です。紹介で行った場合は時間を割いていただける可能性が高くなる一方で、本人が特にその話をしたくない場合でも、紹介者との関係で嫌々ながら引き受けられる場合があります。これではいい聞き取りはできません。それ以上に懸念されるのが、紹介者との関係を意識した語りが行われることです。政治家と官僚、上司と部下、企業と顧客といった関係を意識していただければわかりやすいかと思います。

これに対して、直接依頼した場合は、もちろん、受けてもらえる可能性は低くなりますが、その一方で、特定の人物に影響されない語りを引き出せる自由度があり、信頼性の高い情報を得られる可能性が高くなるというメリットがあります。

連絡の方法について、メールがいいですか、電話がいいですか、手紙がいいですかと聞く学生もよくいます。こうした質問をする人は、もしかするとオーラル・ヒストリーというものに向いていないかもしれません。それぞれの通信メディアの持っている特性を理解して、相手がどのように考えるか、受け取るのかということイメージできるかどうかは、オーラル・ヒストリー全体の成否に関わる、対人理解力に起因するものだからです。

## 6-2 資料、質問表の作成—事前作業



アポイントが取れば、いよいよ実際に聞きに行くことになります。それには、何を調べ、何を持ち、何を共有するか、という事前準備が必要であり、それが当日の成否を左右することはいうまでもありません。当然、相手の著作のうち関係するものや、発言、新聞記事はいるだろう、相手の履歴も押さえていかなくてはいけない。「いや、それはね、3年前に課長だった時…」「課長って何課長だったんですか？」とその場で止まってしまったりしてはいけないから、履歴も必要、周辺地域についても押さえておかないと、、と考え出すと切りがありません。心配性の方は、これだけでストレスで一杯になってしまうでしょう。

では、どのような準備が必要なのでしょう。これは、当日どのような内容を聞きたいのか、その部分に特化してリサーチをしておくことが重要だと思います。一般的な時代背景、経緯と、特化した事項の情報があれば、相手の語りを深めていくことができます。よくある失敗は、その時期の関連事項を網羅しようとしてしまうことです。オーラル・ヒストリーでは、その時代の全体像を描き出すことを目的とするわけではないのですから、相手の語りを引き出せるための、最もマクロな時代背景と、ミクロなディテールの両端を押さえておくのが肝要でしょう。

より重要なのは、当日の手持ちの資料をどのように用意するかです。以前、プロジェクトで関わっていた時によくあったのが、アシスタントのみなさんが頑張ってくれた結果、厚い冊子体の資料が前日に渡されるというケースでした。これでは事前に読む時間もありませんし、何より、当日の役に立ちません。当日は、話を聞きながら、次の展開を考えつつ進むわけですから、その中で手際よく扱うことのできる、要約された情報が必要となります。大体、A4用紙で3枚ぐらい、質問票が1枚と、その人のその当時のことに関する履歴が1枚、人事が1枚というのが、これまでの経験でのベストのように感じています。

もうひとつ、事前にしておくべきことに、相手との接触があります。当日、その場においてしまえば、もうあとは制約された時間のなかで奮闘するしかありません。その限られた時間を有効に使うには、ファーストコンタクトの際に、相手からどれだけ事前に必要な情報を得られるかがポイントになってきます。お目に掛かることができれば、それが何よりですが（これを第0回と呼んでいます）、通常はそうはいきません。

ですが、事前にアポイントを取る際には、必ず先方とやりとりする機会があります。ここでは、文字資料では得られないが、事前に知っておきたい情報を個別に質問して得ておくことが有効です。政治家や官僚の場合、案外把握しにくいのが履歴です。表に出ている履歴は主要なものに限られていることが多く、この全体像を調査するには高い専門知識と時間が必要になります。可能であれば、事前のやりとりの中で確保しておきたい情報です。

### 6-3 語り手のタイプ

もうひとつ、事前にコンタクトを取っておくと、相手の話しぶりを確認できることが、のちのち大きな利点になります。相手は一方的に、圧倒的に話をするタイプなのか、こち

らから聞かれたことに答えていく受動的なタイプなのか。話し手のイメージを事前につかむのは、聞き取りの構造を組み立て、有効な質問票を作成する上でとても重要な情報になります。同時に、こちらがどういうことを聞きたくて、どういうスタンスでアプローチしているのか、ということを手前に相手に明確に伝えることも、聞き取りの充実に有益なこととなります。

不思議といえば不思議なのですが、研究にこれだけ使えらると思ってわかっていても、実際にお話を伺いに行く日は、耐え難い緊張感があります。今日も、ここで話すること自体はオーラル・ヒストリーではないのですが、来るまでに奇妙な緊張感があるんですよね。京都駅で降りて、お昼ご飯を食べてからここまで歩いてくる時に、ああ森さんが待っているから、そろそろ行かなければと思う反面、どこか、嫌がっている自分があるんですよね。みなさんも、そうした経験がおありだと思います。それはなぜかといえば、相手の顔が見えない、初対面による緊張があるわけです。事前に皆さんがどういう方たちなのかをもう少しわかっていれば、そのハードルは、恐らくとても下がります。オーラル・ヒストリーの場合も同じですが、何より聞き手が理解しておかなければならないのは、お話を伺いにいく自分以上に、話をする相手の方がこうした種類の緊張をもって待っている、ということです。どういう人が何を聞きに来るのかわからない、ということはすごく不安なはずですよ。極端に言えば、あの時の判断を誤っていたと追求されるかもしれない、あの時にしてしまった秘密に迫られるかも知れない、とこちらの意図とは無関係に考えられているかも知れないわけです。ですから、相手に対しても、自分が何を聞きたいのかということが正確に理解してもらえるように努力しておくことが、とても大切になります。

そうしたやりとりをする中で、当日用いる質問票を洗練していくこととなります。自分から非常に強く話してくれる人の場合、質問票を精緻にする必要がある。そうでないと、本人が話したい、つまり定型の語りを話されただけで2時間くらいすぐ経ってしまいます。こちらの側である程度、コントロールをかけられるような質問票、細かな質問票を書いておけば、こうした事態は避けることができます。

逆にこちらが引き出していけないと話していただければよいような場合は、むしろ質問票を薄く作っておきます。薄く作っておいて、普段その場でする質問のなかで、細かく聞いていくことをします。なぜかという、質問票というのは、あらかじめ送られて一度本人が目に見えるものです。細かなことが書いてあれば、「今日はこのことを聞かれるんだな。じゃあこの順番で行こう」という風に、たくさん話される方は考えます。わりとディフェンスに話される方は、逆にそこでディフェンスを高める要素は排除しておく。そうして、当日、細かく対応していくという方法が有効だと感じています。この場合、相手と共有する簡易版の質問票と、手元に置く詳細版の質問票の二つを準備しておくのも方法でしょう。

#### 6-4 グループによる聞き取り

次に、聞き手のグループについてお話しします。恐らく、これまで聞き取りに取り組ん

でいらした皆さんも、お一人でされたことが多かったのではないかと思います。一人で聞かれて見て、どうだったでしょうか。質問して、相手の回答を確認しながら次の質問を考えつつ、メモを取って、事実関係を思い出して、、、となかなか聞くこと、聞き出すことに集中できなかったのではないかと思います。一人で聞くことには、どうしても限界があるわけです。

ですから、研究仲間や研究室の先輩後輩で結構ですから、複数名で聞き取りに臨まれることをお勧めしたいと思います。2時間もお話を聞くことになっているけれども、質問は足りているのだろうかといったプレッシャーの中、相手の話を理解して、自らの研究に照らしつつ、次の質問を考え、筆記もして、タイムキープも行う。これは3人分くらいの仕事を一人でしているわけですから、どうしても制度が落ちます。ですから、メイン、サブ、サポートといった役割分担をして、複数名で聞き取りに臨む。そうすれば、メインの聞き手が気付かなかった部分にサブが気付いたり、メインとは異なる視点からサポートが切り込んでいくことによって、語りの豊かさを膨らませていくことが可能です。もちろん、聞き手の間のチームワークが重要になりますが、この方式が最も有効であろうと考えています。

## 6-5 聞く技法と禁忌

聞き方にはいろいろな方法があります。これは、政策研究大学院大学で行われた方法論研究会でも検討してきたことですが、やはりケースバイケースです<sup>25</sup>。相手によって、聞き手によって、テーマによって何がよいかは異なり、これが万能という聞き方はないように思います。

他方、カウンセリングで用いられる目線の高さ、当て方、オウム返し、相槌といった、相手に不要な緊張感を与えずに話を引き出すための手法は、オーラル・ヒストリーをする際にも有用だと感じています。その他にも、経験則的な技法がありますが、こうしたことに関心がある方は、永江朗さんの一連の業績を参照されるのがよいだろうと思います<sup>26</sup>。

むしろ、押さえておいて頂きたいことは、反論とまとめは禁忌であるということです。相手が明らかに嘘を言っていることというのも、意図的であるかどうかは別にして、やはりあります。相手の考え方が聞き手の理解や信念と相容れない場合ももちろん出てきます。こうした場合には、質問をすることはもちろん必要ですが、反論をしたり議論をしたりすることは、相手の認識を知り、体験記憶を記録にするというオーラル・ヒストリー本来の目的から逸脱します。それは、話を聞いて帰ってから、論文にする段階でいくらでもできるはずですが、その場で議論をするということは、オーラルを終わらせかねないですし、そ

<sup>25</sup> 政策研究大学院大学 C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクトでは、聞き取りの方法論について18回にわたって研究会を開催した。そのうち、4回分が『オーラル・ヒストリー方法論研究会報告』として冊子化されている。

<sup>26</sup> 例えば、永江「インタビューの技術」(前掲、御厨編『オーラル・ヒストリー入門』所収)、永江『インタビュー術!』講談社(講談社現代新書)、2002年。

の後の語りを失敗させる可能性が非常に高く、かつ、そこは本来、議論の場ではないのですから、議論そのものにあまり意味が生まれません。害多くして、ということであろうと思います。

まとめ、というのも聞く側の姿勢として気をつけたいところです。話し手の方も、決してスムーズにお話頂けるばかりではありません。なかなか覚えていらっしゃらないことを思い出して頂いたり、本人の認識順序とは違う手順でこちらが聞いてきたことに対応して頂いたりしているわけですから、どうしても話が迂遠になったり、拡散したりすることがあります。このときに、「今おっしゃったことはこういうことですね」というまとめをしたくなるのは人情かもしれません。しかし、一度相手の立場になってみると、頑張って記憶を引き出して、思い出して話をしたのに、それを簡単に、いささか自分の意図と異なる部分を持ちながらまとめられてしまう。これをすると、特に高齢の方はお疲れになります。加えて、もっと細かく聞くことができる部分をさらっとまとめてしまうことで、可能性を放棄していることを押さえておいて頂きたいと思います。

#### 6-6 「開かれた質問」と「閉ざされた質問」

先ほど、カウンセリングの手法が有用だとお話ししましたが、その関連でもう1つ、ここが一番大事だと思います。心理学の言葉で「開かれた質問」と「閉ざされた質問」ということをお話しておきたいと思います。「閉ざされた質問」というのは、イエス、ノーのように二択で答えられる質問です。「今日、京都は寒いですね」と聞けば、「はい」「いいえ」で答えられますね。「ちょっと風が冷たかったですかね」。これも「はい」「いいえ」で答えられますよね。これが閉ざされた質問です。カウンセリングを行う際には、いきなり思い質問を投げかけても相手は応えにくいわけですから「今日、暑かった？寒かった？」「暑かった」「どうやって来たの？」「バスで来た」「どこから来たの？」「京都駅から来ました」「何番のバスに乗りましたか？」「206番に乗りました」「206番のバス、どうでした？」「とても混んでいました」と進んでいく。イエス、ノーで答えられる「閉ざされた質問」から、だんだんと自分の感覚が入っていくような「開かれた質問」に変えていくわけです。

今の例だと、「混んでいた」というところに話し手の主観、認識が入ってきていますよね。ここで5W1Hの質問に、流れのなかで切り替えたからです。混んでいたのなら、混んでいた時どう思ったのかを聞いてみましょう。「人がたくさんいて嫌だった」。では、その時にどうしたいと思ったのか。ジュースを飲みたいと思った。「ああ、そう。ジュース好きなの。どういうジュースが好きなの？」「オレンジジュースが好き」「何でオレンジジュースが好きなの？」「お母さんがいつも買ってきてくれる」「お母さんはいつもどこで買い物するの？」と、流れの中で認識の話に入っていく、だんだんと本人の中に入っていくということがあるわけです。オーラル・ヒストリーでも導入の部分ではよく用いる手法です。

ただ、オーラル・ヒストリーの本体部分においては、閉ざされた質問は基本的に避けるべきと考えられます。「それはよかったですか。悪かったですか」「はい」「いいえ」という

やりとりを考えてみると、閉ざされた質問は、問題設定と判断の主体が聞き手にすりかわってしまっていることに気がつかれるかと思います。この瞬間に、こちら側が主体になってストーリーを構築してしまっているわけです。相手が「そういう見方ではない」といってくれば救われますが、なかなかそうした面倒を負って下さる方ばかりではありません。

そこで大事になってくるのが開かれた質問です。基本的には5W1Hで聞き続ける。「なぜですか」「どうしてですか」「誰がですか」ということで聞くことを続けていくと、語りは非常に豊かなものになり、どんどんと掘り進める部分が現われてきます。「はい、いいえ」の語りは、話している側も聞いている側も面白くありません。閉ざされた質問で聞けるのであれば、手紙やメールで質問項目を出して応えてもらえばいいでしょう。せつかく時間を割いて直接に会っているのですから、定型の語りや、定型の問いに終始することなく、インタラク션을大切にしていくことが肝要でしょう。

### 6-7 テープ起こしの重要性

聞き取りから帰ってきたら、音声記録はぜひ文字化して頂きたいと思います。業者にテープ起こしをしてもらう資金がないから無理、とは思わないで下さい。テープ起こしをご自分でされることに大きな意味があります。テープ起こしは実際にやってみると、1時間のテープを起こすのに、初めてだと10時間ぐらいかかります。文字に起こすという作業は、イメージする以上に大変です<sup>27</sup>。それにも関わらず、これをやってみて欲しいとお話ししますのは、テープ起こしをすることで、自分の質問のよい点、悪い点が如実にわかるからです。聞き方に不安がある方ほど、ご自身の質問を起こして、検証していくことで、聞く力を洗練させていくことができます。

また、テープ起こしをしていくと、自分が相手の話を誤解して次に進んでしまった部分に気付くことがあります。その部分については、必要があれば再質問をお願いすることも可能です。その関連で言えば、文字化すると、相手に内容の確認をしてもらうことができます。チェックというと、なにか相手に改ざんされるようなイメージを持たれるかもしれませんが、内容を確認してもらうことは、研究に使っていくうえでとても大切なこととなります。

さらに話した後に、あのことをもっと話しておけばよかった、このことも伝えておけばよかった、と思うことが、私たちの日常でもよくありますよね。私も今日、この講義を終えて宿に帰ってからそういうことを思うのでしょうか（笑）。ですので、早めに文字起こしをして先方に送ると、追加の情報を加筆していただけることがしばしばあります。そうすると記録が、さらに情報が増えていきます。さらにそういう風にしておけば、いずれ公開して使っていく、反証可能性に耐えることもできます。

---

<sup>27</sup> 具体的なテープ起こしの方法については、丹羽清隆「記録の技法（トランスクリプション）」（前掲、御厨編『オーラル・ヒストリー入門』所収）が参考になる。

## 7.オーラル・ヒストリーの可能性

最後にまとめとして、オーラル・ヒストリーの可能性についてお話ししておきたいと思います。仮説を獲得する、本質を発見するという、相手に対して相手の追体験をするような形で理解をする方法というのは、今日のお話でおわかり頂けたのではないかと思います。

もう1つ、皆さんのように協働や地域共創といった未来志向のことを考える場合に重要となるのが、地域や組織の文化は、内部の方々にとっては当たり前のことであり、表に出てくることは殆どありません。そうした潜在化した知的・文化的資産に対して聞き手という外在的存在がアプローチをしていくことは、その地域を活性化させていく大きなきっかけになるはずで<sup>28</sup>。

先程、オーラル・ヒストリーとは協同著作物として捉えられているというお話をしました。対話の相互性によって課題を発見していく、ということは、常にこれはできていくものであるかと思えます。知らないことの強さを、むしろうまく発揮していただいて、学と官、学と民のよりよい共創を築き上げていってくだされば、と思います。

ご清聴ありがとうございました。

## 8.質疑応答

**司会**：ありがとうございました。それでは質疑応答に入ります。

**院生**：お話ありがとうございました。私は市町村合併について、当事者にお話を聞くことがあるわけですが、一つ悩むのは、当事者が大体、市長とか関係者はいろいろわかるわけですが、誰から聞いたらいいのかということ、つまり聞く順番です。当事者の聞く順番というのは、なるべく中心にいた市長や町長の後に聞こうと、当事者になるべく聞こうとしているのですが、誰から聞いたらいいのか、非常に悩むところがあります。何か順番について考える必要はありますでしょうか。

**清水**：ありがとうございます。聞く順番は、どこからという決まり事があるのではなく、ご自身の研究のリサーチ・デザインに依拠すべきだと思います。ですから、文字資料出観察された時に、それが市長主導であると観察したのなら、まず市長に聞く、ということになるでしょうね。議会であれば、議院事務所に相場観を聞くのも方法でしょう。

**院生**：ちょうど明日、ある財団法人の方とお話しする機会を設けてもらいました。今日には本当に出て正解だったと思えました。聞く準備自体が全くできていない状態なので、明日の朝まで、できるだけ準備していきたいなと思っています。私は今回は初めてで、かつ一人で行くことになるのですが、そういう時に心がけるべきことは何かありますか。

**清水**：初めて、ということですので精神論的なことをいうと、虚心坦懐で聞いてきてくださいねというのが何より第一にお伝えしておきたいことです。聞きに行くと、思っている

---

<sup>28</sup> こうした取り組みを積極的に行っている自治体の代表例として長野県飯田市が挙げられる。同市による成果に、飯田市歴史研究所編『いとなむはたらく飯田のあゆみ』飯田市、2007年がある。

以上に、先ほどお話しした「閉ざされた質問」をしてしまいがちになります。こちらも人間で、相手も人間なので、相互にサービス精神が働くのですよね。相手の話をできるだけ理解しよう、納得しよう、フォローしようという気持ちが出てきます。そうすると「閉ざされた質問」をしがちになると思います。単語で聞いてしまうことも特徴でしょう。それをあまりしないようにして、できるだけセンテンスで、5W1Hを意識しながら、プレーンな気持ちで聞いていくということが一番大事だと思います。

あと明日の朝まででできることで考えるなら、質問票を練り込んで作られるのがいいでしょうね。もちろん、事前に先方にお渡ししておけるに越したことはありませんが、明日の朝でも、質問票がないよりは、はるかにベターでしょう。それをお持ちして「こういう形で今日お話を聞きたいと思うんですけど」と言う。何を聞きたいのかが相手にきちんと伝わること、誤解なくお話していただくことがとても重要です。そして、うまく定型の語りを越えていって頂ければ、面白いオーラル・ヒストリーができると思います。

**院生：**2点、お伺いしたいと思います。私自身の反省も踏まえたところですが、昨年度、ある自治体で「昭和」をテーマにして活性化を図るという研究を行い、市役所で課長を始め、いろいろな方のお話を伺いました。その時は、私は一人で行ったのですが、相手側は二人いらして頂いて、それぞれの立場からのお話を聞きました。そういう場合には、別々にお話を伺う方がよいのか、お一人ずつ聞くほうが有効なのか。それが一つ目の質問です。

もうひとつは、基本的なことなのかもしれませんが、録音をお願いすることによって相手に緊張感に持たせてしまうのではないかと懸念します。録音をせずに、筆記でどうにか対応する方法はあるのか、という点をお聞かせいただければと思います。

**清水：**一つ目のご質問は、大事なポイントかと思います。それもリサーチ・デザインによって変わるものだろうと思います。その場でどういうことが議論されていたか、ということを知りたいのか。それともその人たちの個々の立場について、議論されていたことについて知りたいのか。その場でされた議論を知りたいのであれば、お二人で一度にお話ししていただいた方がよいでしょうし、個々の認識を知りたいのであれば、一人ずつにお伺いするほうがよいでしょう。前者をしたあとに、後者の方法を取るのも一つの手段だろうと思います。

ただ、同じ場所で伺う時は、お二人の権力関係に留意する必要があります。ある学生がとある文化施設のことでお話を伺いに行ったのですが、この時はやはり関係の方がお二人、出ていらっしやった。しかも、それが前任者と現任者であったため、本人は、以前の運営から現在の運営への転換という、最も聞きたかった部分について、なかなか切り出すことができなかつたようです。

逆に、私自身は、聞き手が一人、話し手が七人という聞き取りを行ったことがあります。前半でお話ししたマクナマラのような企画で、関係者に一同に会して頂きました。この時は、個別の理解や認識ではなく、その場の空気といいますか、組織、文化について知るこ

とが目的のオーラル・ヒストリーでしたから、個々の話し手が相互に記憶を喚起しあってくれたおかげで、大変充実した成果を残すことができました。何を、どのように聞きたいか、目的とリサーチ・デザインによって、聞く際の構成は変わっていくし、変えるべきであると思います。

録音とテープ起こしについてのご質問ですが、それは録音することの意味と目的を、聞き手がどのように話し手に説明するかにかかっているように思います。雑誌のインタビューなどを受けられた方はお分かりかと思いますが、実は録音を取らずにメモで記事を書かれた方が誤解が多いものです。録音があれば、私はそうは言っていない、という証明もできるわけですね。ですから、記録作成のために録音は取らせてもらうが、それをどのように扱うかは、原則として聞き手の意思に沿って、相談の上で対応する。テープ起こし原稿については、一度確認をして頂く、ということが相互に確認できれば問題ないと思います。録音に抵抗を持たれる方には、そのように説明して、ご理解を頂いています。もちろん、テープ起こしの内容をチェックしてもらうことと、研究を聞き手に束縛されずに行うことは、並立しますしね。

**教員：**感想を伺いたいなと思ったのですが、行政、公務員には、まさに仰られた組織文化の固着性があると、私自身の経験からも感じます。そうした中で、現在の公務員の思考法、発想法、行動様式が、組織文化のなかで育てられたと特にお感じになることがあれば教えていただければと思います。

**清水：**官僚の方にお話を伺っていて感じるのは、政治家の方、のみならず、一般の方と比べた場合に、語りに飛躍がないということです。着実に進み、冒険はせずに、前例を重視してお話しされる。これはおもしろいなと思いました。

もうひとつは、必要な記録を取らない、記憶と伝承の世界で動いている部分があるというのを強く感じました。根回しの件などは、まさにそうだろうと思いますし、現在、経済産業省や日本銀行が、過去の意思決定を知りうる資料を持たないために積極的にオーラル・ヒストリーに取り組む必要性に迫られたのも、このあたりの影響だろうと考えています。

**教員：**私も歴史に関心を持つようになって、回顧録などをやるうちに、このオーラル・ヒストリーが出てきて、今日、お話を伺えればと思って参りました。今日のご説明のなかで、認識行動、これは相手がどういう風にものを認識しているかという話がありましたが、そのなかで仮説と発見と構築について、もうちょっと具体的なイメージがあれば。

**清水：**これは、内閣法制局の事例でお話しするとわかりやすいと思います。内閣法制局というのは、政府立法による法令が国会に提出されるまでに、各省が起案してきた法案が既存の法令と抵触しないか、法律事項が整っているかといったチェックを行うことをその主要な機能としています。これを法令審査というのですが、従来の研究では、この法令審査は常にブラックボックスとして扱われてきました。政策決定過程を論じる中で、省庁における起案の部分や、政府与党との折衝、国会での審議過程については盛んに研究が行われ



てきたのですが、この部分は、全くと言っていいほど看過されてきました。

ところが、官僚の方にお話しを伺うと、政府立法の過程では、実は鬼門となるのは国会し審議ではなく法令審査だというお話がどこにいても出てきました。これも、研究者と当事者の認識の相違であるわけです。

そこで、これは政策決定過程分析のあり方を変えるようなものになるのではと考え、本格的に内閣法制局の方々にお話を伺い<sup>29</sup>、また、官僚のオーラル・ヒストリーでは、必ず政策決定過程について質問するようにしました。すると、法令審査というのが、形式的な文言の修整だけではなく、実際には事実上の省庁間調整の場となっていることが見えてきました。こうしてそうするとこれが仮説になるわけですね。それを実際の他の法令の制定過程のなかであてはめていくと、どういう風に見えるのかという検証に、現在は研究が進んできています。

**教員：**私は、扱っている時代が古い関係で、本来インタビューをしたい時代の方がなくなってしまっています。そのため、その地域の2代目、3代目といったご子孫にインタビューをしているのですが、そういった場合に気を付けたほうがいいことや、テクニカルなアドバイスをいただければと思うのですが。

**清水：**私もこれは同じ悩みを抱えています。近代を研究対象にしていると、どうして後子孫に伺うのが精一杯ということが殆どですし、その場合は、決まった伝承、まさに定型の語りですが、そもそもご子孫に伝わっている情報が定型の語りだけですから、これは打ち崩しようがないわけですね。ただ、それでもこちらが事前調査を十分にしていくのとは行かないのでは、伺える話の広がりにも随分と差が出てきます。

地域の記憶ということにフォーカスされるのであれば、マクナマラ方式が有効なように思います。記憶の相互喚起を有効に使うべきでしょうね。また、当時の地図や写真といった、その地域の光景をイメージできる映像資料があるととてもよいと思います。場所の情報は、記憶を喚起する上では大変役に立ちます。私たちも、よく「そのお部屋はどんなお部屋でしたか」と聞くんですね。そう伺うと、先ほどの内閣法制局の場合であれば、「それはね、ここの所に長官室があって、こっちに参事官室があってね。こうやって机が並んでいるんだよ」「その机の横の『資料』という棚にはどういうものが入っているんですか」「そこは、加除式の法令と、、、」と、極めて具体的な話が始まります。話し手は具体的に記憶を思い出し、聞き手はそれを映像でイメージできるようになります。インタラクションの環境として、場というのがとても大切になるわけです。ですから、学生には、どんな場所で聞くのかにも意識を払うように指導しています。

時代の空気ということで言えば、当時の新聞の一面記事で、重要と思われるもの、当時

---

<sup>29</sup> 既刊の内閣法制局オーラル・ヒストリーには『工藤敦夫(元内閣法制局長官)オーラル・ヒストリー』(聞き手：御厨貴、金井利之、清水唯一朗。GRIPS-COE、2005年)があり、これには明治大学政経学部の西川伸一氏によるコンメンタール『工藤敦夫オーラル・ヒストリー』を読む(『政経論叢』74巻3・4号、2006年)がある。

の記憶を喚起するのに有効と思われるものをまとめていってお渡しするという手法をとることもあります。データにまとめてエクセル形式の年表で無味乾燥に出すのではなく、新聞記事として見てもらうことで、生の感覚を思い出して頂くという手法です。

**教員：**今日はどうもありがとうございました。社会史、社会学の立場から、どちらかというと、ライフ・ヒストリーのところをいくつか伺いたいと思います。今日のお話で一番印象に残ったのが、公人とのオーラル・ヒストリーを行う際には、できる限りインフォーマルな付き合いをしないと仰ったことです。社会史の場合は、むしろインフォーマルな付き合いをすることで、人間関係を築いて定型の語りをできるだけ崩していくかと思います。そういうインフォーマルな付き合いをしないというルールを設定したのは、リサーチ・デザインによるものなのか、清水さんはライフ・ストーリーの経験もおありでしょうから、そのあたりの感覚をお聞きしたいと思います。

**清水：**これは、ひとつは資金的な問題です。政策研究大学院大学のプロジェクトは公費で行っているもので、そうした見知から、政治家、官僚の方もオーラル・ヒストリーをお受け頂いていたという関係がありました。その部分で、特にお話を伺っている間は、きちんとけじめをつけていった、ということです。しかし、もちろん、聞き取りの中ではお茶を頂きながら雑談もしますし、連絡調整をする中で、先方との信頼関係は出来上がっていきますし、そうした努力は意識的にしてきました。

逆に私が通常携わっているような私人へのオーラル・ヒストリーの場合では、西岡常一さんへの聞き取りのように常時お酒を友にして、ということはありませんが、毎回、お茶とお菓子を交えて歓談させて頂いています。お菓子ひとつも、大きな材料になってお話が弾みますしね。相手のコミュニティから、遠くないところにいるのだ、と思って頂くのは、オーラル・ヒストリーを進める上ではとても重要だと思います。

**司会：**時間も参りましたので、本日はこのあたりで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

## 9.参考文献

具体的なオーラル・ヒストリーの成果物は枚挙に暇がないため割愛し、オーラル・ヒストリーについて考える上で示唆に富む雑誌論文を、本論の拙い議論を補うものとして掲げておく。なお、本論で取り上げたものは省略した。

猪木武徳「聴き取りの効用、オーラル・ヒストリーの価値—『同時性』と『現地性』」（『経済志林』73巻4号、2006年）

大原社会問題研究所「特集 社会科学研究とオーラル・ヒストリー」1～3（『大原社会問題研究所雑誌』585、588、589号、2007年）

清水透「オーラル・ヒストリーの地平」（『学術の動向』12巻3号、2007年）

清水唯一朗「日本におけるオーラルヒストリー—その現状と課題、方法論をめぐって—」（慶

應義塾大学 G-SEC FCRONOS、2003 年)

武田知己「政治史研究からみたオーラルヒストリー (1) 「記憶」 から「史料」 を作るということ」(『大東法学』16 卷 1 号、2006 年)

——「オーラルヒストリーの可能性と歴史研究」(『歴史評論』703 号、2008 年)

東京外国語大学史資料ハブ地域文化研究「オーラル・ヒストリーの可能性とアーカイヴズの課題」1・2(『史資料ハブ地域文化研究』2、5 号、2003 年、2005 年)

中村政則「オーラル・ヒストリーの可能性」1・2(『歴史と民俗』22、23 号、2006 年、2007 年)

成田龍一「書評 中村政則『昭和の記憶を掘り起こす』、あるいはオーラル・ヒストリーと歴史学の刷新について」(『UP』37 卷 11 号、2008 年)

日本政治学会編「特集 オーラル・ヒストリー」(『年報政治学 2004』岩波書店、2004 年)

原彬久「政策決定過程とオーラル・ヒストリー」(『公共政策研究』2 号、2002 年)

御厨貴「今なぜオーラル・ヒストリーか」(『言語』35 卷 2 号、2006 年)

——「オーラルヒストリーについて」(『北の丸』37 号、2004 年)

歴史学研究会編「方法としての「オーラル・ヒストリー」再考」1・2(『歴史学研究』811、813 号、2006 年)